

パニウム - ナンバー・テン

諸国の興亡：十四万四千人の封印とダニエル書11章10-16節に隠された預言的歴史

Jeff Pippenger

2025-04-16

十一節と十二節の主題は南の王の興亡である。同様に、第二節で最後の大統領によって表されるアメリカ合衆国の最終的な興亡、そして第三節と第四節に表される国際連合の最終的な興亡、すなわち竜の力の最後の地上の代表者の興亡も扱われている。五節から九節は、538年から1798年に至る教皇権の歴史を表している。538年は教皇権に権力が与えられたことを示し、1798年は教皇制が致命的な傷を負ったことを示す。したがって、五節から九節は獣の最終的な興亡を表している。十節は、旧ソ連によって表される南の王の没落の年として1989年を示している。

歴史の舞台に登場したすべての国は、「見張る者と聖なる方」の目的を果たすかどうか明らかにされるように、地上で自らの場所を占めることを許されてきた。預言は、世界の大帝国—バビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマ—の興亡をたどってきた。これらの帝国においても、また力の劣る諸国においても、歴史は繰り返された。それぞれには試練の時期があり、いずれも失敗し、栄光は色あせ、力は失われ、その地位は他の者に占められた……

聖書のページに明らかに示されている諸国の興亡から、人々は、外面的でこの世的な栄光がいかに無価値であるかを学ばなければならない。バビロンは、その権勢と栄華——それは、その後この世界が目にしたことのないほどのものであり、当時の人々にはじつに堅固で永続するように見えたその力と栄華——が、いかに完全に過ぎ去ってしまったことだろう。「草の花」のように、それは滅び去った。神を土台としないものはすべて、そのように滅びる。神の目的に結びつき、その品性を表すものだけが存続しうる。私たちの世界が知っている確固たるものは、神の原則だけである。教育、177、184。

十一節と十二節は、ロシアによって代表される南の王の最後の興亡を示している。十三節から十五節は、アメリカ合衆国の最後の興亡を示している。第十一章の預言的叙述全体は、諸王国の興亡という構造の上に築かれている。預言を学ぶ者は、第十一章の預言のメッセージを正しく見分けうる可能性を少しでも持つためには、この事実を考慮に入れなければならない。

ダニエル書11章の基礎的な視点は、それが諸王国の興亡を繰り返し例証しているという点にある。ホワイト夫人が「このようにしてメド・ペルシャの王国、そしてギリシアとローマの王国は滅びた」と述べたとき、彼女は「ギリシア」を竜、「ローマ」を獣、「メド・ペルシャ」を偽預言者として特定している。すなわち、日曜法令において台頭を開始し、ヨハネの黙示録16章12～21節の成就として世界をハルマゲドンへ導く、竜・獣・偽預言者から成る地上最後の王国の最終的な興亡を指し示しているのである。彼女は、「単なる外面的でこの世的な栄光がいかに無価値であるかを学ぶ」ために採用すべき視点と

して、「聖書のページに明らかに示されている諸国の興亡」へと神の民を導いている。

私たちが「外面的でこの世的な栄光がいかに無価値であるかを学ぶ」必要がある理由は、「神を土台としていないものはすべて滅びる」ことをさらに理解するためである。したがって、自分の土台を神に置くか否かは、生死に関わる問題である。そこからさらに思いを進めて、ホワイト姉妹は、「神の目的に結びつき、神の品性を表すものだけが存続しうる」と述べ、神を土台とするとは何を意味するのかを定義している。彼女は、神の土台の上にはないものはすべて滅びると説明したばかりであり、さらに、その土台の上に築かれるものを規定する二つの条件として、あるものが「神の目的に結びついている」こと、そして「神の品性を表している」ことを挙げている。神の品性こそが神の土台である。

そして、その段落の締めくくりの一文で、彼女は「神の原則は、私たちの世界が知っている唯一の確固たるものだ」と述べている。神の品性はその原則であり、その原則は神の品性を表している。万物の土台である神に対して人類がどのように関わるかは、生死に関わる命題である。私は、ダニエル書第11章の基礎構造は諸王国の興亡の物語の上に築かれていると主張する。正しい研究のあり方を靈感が私たちに教えている箇所がある。

非難されるべきではない歴史研究というものがある。聖なる歴史は、預言者の学校で学ばれた科目の一つであった。諸国民に対する神の取り扱いの記録には、主の足跡がたどられていた。ゆえに今日、私たちは地上の諸国民に対する神の取り扱いを考察すべきである。私たちは、歴史の中に預言の成就を見、大いなる改革運動における摂理の働きを学び、そして、大争闘の最後の闘いのために諸国民が動員されていく過程における出来事の推移を理解すべきである。『いやしの奉仕』441頁。

聖別された歴史研究とは、神が地上の諸国民をどのように扱われたか、また神がご自身の改革運動を摂理によっていかに導かれたかを学ぶことであり、したがって聖別された歴史には外的な側面と内的な側面の双方の研究が含まれる。神の予言の御言葉を確証するために歴史を用いる目的は、その予言的歴史を用いて、「大いなる論争の最終的な闘争に向けて諸国民が動員されていく過程における出来事の進展を理解する」ことである。ホワイト姉妹による前の段落は、王国の「興亡」によって表される基礎的構造に基づく聖なる歴史の予言的モデルを構築する必要性についての、非常に啓発的な説明から取られたものであった。

キリストのための働きに備えるにあたり、多くの人は、歴史や神学の著作について広範な知識を身につけることが不可欠だと考えている。彼らは、この知識が福音を教えるうえでの助けになると思っている。しかし、人間の見解を苦心して学ぶことは、彼らの奉仕を強めるというより、むしろ弱める傾向がある。歴史や神学に関する分厚い大冊が図書館を埋め尽くしているのを見ると、私はこう思う。「パンでないものに、なぜ金を費やすのか」。ヨハネによる福音書第6章は、そのような書物に見いだせる以上のことを私たちに語っている。キリストは言われる。「わたしはいのちのパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴かない」。「わたしは天から下って来た生けるパンである。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きる」。「わたしを信じる者は永遠のいのちを持っている」。「わたしがあなたがたに語ったことばは、霊であり、またいのちである」。ヨハネ6:35、51、47、63。

非難されるべきではない歴史研究というものがある。聖史は、預言者の学校で学ばれた科目の一つであった。諸国民に対する神の御取り扱いの記録のうちに、エホバの御足跡がたどられていた。ゆえに今日、私たちは地の諸国民に対する神の御取り扱いを考えなければならない。私たちは歴史の中に預言の成就を見、大いなる改革運動における摂理の働きを学び、さらに、大いなる論争の最後の闘いに向けて諸国が結集されていく出来事の推移を理解しなければならない。

そのような学びは、人生に対する広く包括的な見方を与えるだろう。私たちが、その諸関係や相互依存の一端を理解し、社会と国家という偉大な同胞共同体の中でいかに驚くべきしかたで結び合わされているか、そして一人の構成員に対する抑圧と墮落がどれほど大きな程度で全体の損失を意味するかを理解する助けとなるだろう。

しかし、一般に学ばれている歴史は、人間の業績、戦いの勝利、権力と偉大さの獲得を扱っている。人間の営みにおける神の働きは見失われている。国々の興亡の中で、その御旨がどのように成就していくのかを学ぶ者は少ない。

そして多分に、学ばれ教えられている神学は、人間の思弁の記録にすぎず、「知識なき言葉によって助言を暗くする」にしか役立たない。往々にして、これら多くの書物を集める動機は、精神と魂の糧を得ようとする願いというよりも、むしろ哲学者や神学者の思想に通じたいという野心や、人々に対して学問的な術語や命題でキリスト教を提示したいという欲求なのである。

書かれたすべての書物が、聖い生涯に資するとは限らない。「わたしから学びなさい」「わたしのくびきを負いなさい」「わたしの柔和と謙遜を学びなさい」と、大いなる教師は言われた。あなたの知的な高慢は、いのちのパンを欠いて滅びつつある魂と交わる助けにはならない。あなたは、これらの書物の学習において、それらが本来キリストから学ぶべき実際的な教訓に取って代わることを許してしまっている。このような学びの結果では、人々は養われない。心を疲れさせるこの種の研究のうち、魂のために成功する働き人となる助けを与えるものは、ほとんどない。

救い主は「貧しい人々に福音を宣べ伝えるために」来られた。ルカ4:18。主は教えにおいて、最も平易な言葉と最もわかりやすいたとえを用いられた。また、「庶民は喜んで彼の言葉を聞いた」とある。マルコ12:37。この時代に主の働きをしようとする人々は、主が与えられた教えへの、より深い洞察を必要としている。

生ける神の御言葉は、あらゆる教育の中で最高のものである。人々に仕える者は、いのちのパンを食べる必要がある。これによって彼らは霊的な力を得て、そのときあらゆる階層の人々に奉仕する備えができる。『癒しの奉仕』441-443。

ホワイト夫人はさらに、王の選択に基づいて王を立てたり退けたりするという神の力の働きの現れを認識することが、歴史研究の真の哲学であると定義している。

諸国の歴史において、神の言葉を学ぶ者は、神の預言が文字どおりに成就するのを目の当たりにすることができる。ついには打ち砕かれ、粉々になったバビロンは、繁栄のうちにその支配者たちが自分たちを神から独立した者とみなし、王国の栄光を人間の業に帰したために、滅び去った。メド・ペルシャの帝国にも、そこでは神の律法が踏みめにじられていたゆえに、天の怒りが下った。主への畏れは民の大多数の心に宿ら

なかった。邪悪、冒涇、そして腐敗がはびこった。その後続いた諸王国はさらに卑しく腐敗しており、道徳的価値の尺度において、より低く、さらに低く沈んでいった。

地上のすべての支配者が行使する権力は天から授けられたものであり、そのように授けられた力の用い方いかんに、その成功がかかっている。すべての者に、聖なる見張りの言葉はこうである。「あなたはわたしを知らなかったが、わたしはあなたに帯を締めさせた。」イザヤ 45:5。また、昔ネブカドネザルに語られた言葉は、すべての者にとって人生の教訓である。「義によってあなたの罪を断ち切り、貧しい者に憐れみを示すことによってあなたの不義を断て。そうすればあなたの安寧が長らえるかもしれない。」ダニエル 4:27。

これらのことを理解すること——すなわち「義は国を高くする」こと、「王座は義によって堅く立ち、憐れみによって支えられる」ことを理解し、「王たちを廃し、王たちを立てる」方の力の現れにおいて、これらの原理の働きを認めること——これこそが歴史の哲学を理解するということである。箴言14:34;16:12;20:28;ダニエル書2:21。

このことが明確に示されているのは、神の言葉においてのみである。ここでは、国家の力も個人の力も、彼らが無敵にするかのように見える機会や有利な条件の中にあるのではなく、彼らが誇る偉大さのうちにもないことが示されている。それは、彼らがどれほど忠実に神の目的を果たすかによって量られる。『預言者と王』501、502。

11節と12節の主題は南の王の興亡であるが、より重要なのは、これらの節が、十四万四千人の封印と、10節に示されているように1989年の終わりの時に始まった三つの試練の第二を示していることである。

その封印は、ダニエルが獅子の穴に入れられたこと、三人の勇士が火の炉に入れられたこと、第2章で獣の像に関するネブカドネザルの夢を理解するためにダニエルと三人の勇士が祈ったこと、第9章でダニエルがレビ記26章の祈りをささげたこと、知識の増加を悟る賢い者たち、ゼカリヤ書第3章でヨシュアの罪が取り除かれること、第4章のゼルバベル、ヨセフがエジプトで第二の支配者となること、ペンテコステに先立つ10日間、二階の部屋にいた弟子たち、エクセターのキャンプ集会におけるミラー派の人々、凱旋入城で行列を先導するラザロ、そして黙示録第7章の十四万四千人によって表されている。

第十一節は2014年、ウクライナ戦争の勃発時に到来し、2023年7月には神の民が「白くされる」視覚的なテストが始まった。第十一章の五行目は第十三節から第十五節である。

第5ラインの概要

北の王は帰って来て、前よりも多い軍勢を整え、幾年かの後に、強大な軍勢と多くの富を携えて必ずや攻め来る。その時、多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。また、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就しようとして自らを高ぶらせるが、彼らは倒れる。こうして北の王は来て、攻城の土塁を築き、最も防備の堅い城々を攻め取る。南の軍勢も南の精鋭もこれに耐えられず、抗し得る力は誰にもない。ダニエル書 11:13-15。

これらの聖句は紀元前200年に成就し、対立する王たちとその同盟を含むパニウムの戦いを指し示すとともに、異教ローマが初めてダニエル書11章の歴史に介入した時点をも示

している。これらの聖句には、聖書の預言における第六の王国の最終的な興亡だけでなく、ペテロが十四万四千人の封印を特定する場所であるカイサリア・フィリピをキリストが訪れたという聖書の歴史も含まれている。この歴史は、「清められ、白くされ、試みられる」という十二章の三つの試練のうち第三のものが到来することにより、十四万四千人の封印を型どっている。

この三つの節は、アメリカ合衆国における日曜法が表されている第16節へと導いている。1844年8月17日にエクセターのキャンプ集会が終わったとき、賢い乙女たちは六十六日で合衆国東海岸一帯に「真夜中の叫び」のメッセージを伝え広めた。すべての乙女が目覚まし、一方の群れには油がないという時期があり、そのことを特徴づけるすべての事柄が伴う。シモン・バルヨナの名がペテロに変えられたとき、十四万四千人の封印が示される。その時点から、イエスは十字架に関わる出来事について弟子たちに教え始めた。

十字架は恵みの時の終わりの象徴であり、バプテスマのヨハネによって予型とされ、そのヨハネ自身もエリヤによって予型とされていたウィリアム・ミラーは、バプテスマのヨハネとエリヤがそうしたように、「恵みの時の終わりに関する出来事」を提示するために立てられた。ヨハネはこう言った。

しかし、彼は多くのパリサイ人とサドカイ人が自分のバプテスマを受けに来るのを見たとき、彼らに言った。「まむしの子らよ、迫り来る怒りから逃れよと、誰があなたがたに警告したのか。」マタイによる福音書 3:7

イライジャはこう言った。

アハブは木立を設けた。アハブは、彼以前のすべてのイスラエルの王以上に、イスラエルの神、主を怒らせることをした。彼の時代に、ベテル人ヒエルがエリコを建てた。彼は、その基を彼の長子アピラムをもって据え、その門を彼の末子セグブをもって立てた。これは、主がヌンの子ヨシュアによって語られた言葉のとおりであった。ギレアドの住人であるテシベ人エリヤがアハブに言った。「私が御前に立って仕えるイスラエルの神、主は生きておられる。私の言葉によらなければ、この数年の間、露も雨も降ることはない。」列王記上 16:33-17:1。

シスター・ホワイトは、現代の改革者としてのウィリアム・ミラーの働きについて、次のように述べた。

人々が自らの危険に気づかされることが必要であり、また、猶予期間の終結に関連する厳粛な出来事に備えるよう鼓舞されることが必要であった。The Great Controversy, 310.

ダニエル書11章の最後の6節は、「恩恵期間の終結に関連する出来事」を表している。これらの出来事は、『終わりの時』である1989年に封印が解かれ、明らかにされた。

十字架にかけられる前に、救い主は弟子たちに、自分が殺され、墓からよみがえることを説明され、その言葉を心に深く刻ませるために天使たちがそこにいた。しかし弟子たちは、ローマのくびきからの地上的な解放を期待しており、彼らのすべての希望を託したお方が不名誉な死を遂げるといふ考えを受け入れることができなかった。彼らが心に留めておくべき言葉は心から追いやられ、試練の時が来たとき、彼らは備え

ができていなかった。イエスの死は、まるで事前に警告がなかったかのように、彼らの望みを完全に打ち砕いた。同じように、預言においても、将来はキリストの言葉によって弟子たちに示されたのと同じくらい明瞭に、私たちの前に開かれている。恵みの時の終わりに関わる出来事と、艱難の時に備えるための働きは、はっきりと示されている。だが多くの人々は、これらの重要な真理について、まるで決して明らかにされたことがないかのように、理解していないのと同然である。サタンは、彼らに救いに至る知恵を与えるあらゆる感化を奪い去ろうと目を光らせており、彼らは備えのないままで艱難の時を迎えるだろう。『大争闘』 595。

パニウムとも呼ばれるカイサリア・フィリピ、すなわち十三節から十五節に当たる箇所、キリストは弟子たちに十字架について教え始められ、こうして1844年10月22日までのエクセターのキャンプ集会の歴史を象徴した。十四万四千人の改革運動の始まりにおいては「恩恵期間の終結に関連する出来事」の封印が解かれ、そして十四万四千人のその運動の終わりにおいては、「恩恵期間の終結に関連する出来事」が四十節に隠された歴史の中で封印が解かれる。

「今日、エリヤとバプテスマのヨハネの霊と力をもって、神に任命された使者たちは、猶予期間の終わりの時と、万王の王、万主の主としてのキリスト・イエスの顕現に関連してまもなく起こる厳粛な出来事へと、裁きが迫る世界の注意を喚起している。」『預言者と王たち』 715、716頁。

「恩恵期間の終結に関連する出来事」は、40節の隠された歴史において封印が解かれる出来事である。ゼカリヤ書第3章では、調査審判の最終場面が描写されている。靈感は、ゼカリヤの証言をエゼキエル書第9章で印を受ける者たちと結び合わせている。

神の民は、この地で行われている忌むべき行いのために、ため息をつき、嘆き叫んでいる。彼らは涙をもって、神の律法を踏みこむ危険を悪しき者たちに警告し、また、自らの背きのゆえに言い尽くせない悲しみを抱きつつ、主の御前にへりくだる。悪しき者たちは彼らの悲しみをあざけり、その厳粛な訴えを嘲笑し、彼らのいう「弱さ」をせせら笑う。しかし、神の民の苦悶とへりくだりは、罪の結果として失っていた品性の力と高貴さを彼らを取り戻しつつあることの、疑いようのない証拠である。彼らがキリストに近づき、その完全な清さに目を注いでいるがゆえに、罪のはなはだしき罪深さをこれほど明確に見分けるのである。彼らの悔い砕かれた心とへりくだりは、嘆くべき理由を見いださず、キリストの謙遜を侮り、神の聖なる律法に背きながら完全だと主張する者たちの自足して高慢な霊よりも、神の御前において比べものにならないほど受け入れられる。柔和と謙遜は、力と勝利の条件である。十字架のもとにひれ伏す者には、栄光の冠が備えられている。この嘆く者たちは幸いである。彼らは慰められるからである。

忠実に祈る者たちは、いわば神とともに籠もっている。彼ら自身は、自分たちがどれほど堅く守られているかを知らない。サタンに駆り立てられ、この世の支配者たちは彼らを滅ぼそうとしている。しかし、もしドタンでエリシャの従者の目が開かれたときのように彼らの目が開かれるなら、神の御使いたちが自分たちを取り巻いて宿営し、その輝きと栄光によって闇の軍勢を押しとどめているのを目にするだろう。

神の民が御前で自らの魂を苦しめ、心の清さを嘆願するとき、「その者たちから汚れた衣を取り去れ」との命令が下され、「見よ、わたしはあなたの咎をあなたから取り去った。わたしはあなたに新しい衣を着せる」との励ましの言葉が告げられる。試練に会い、誘惑を受けながらも忠実であった神の子らの上に、キリストの義のしみなき衣が着せられる。軽蔑されてきた残りの者は栄光の衣をまとい、もはや世の墮落によって汚されることはない。彼らの名は小羊のいのちの書にとどめられ、あらゆる時代の忠実な者たちのうちに記される。彼らは欺く者の策略に抵抗し、竜の吠え声によっても忠誠を翻されることはなかった。今や彼らは誘惑者の企みから永遠に守られている。彼らの罪は罪の元凶へと移される。そして残りの者は、赦され受け入れられるだけでなく、栄誉を与えられる。「清い冠」が彼らの頭に据えられる。彼らは神に対して王であり祭司となる。サタンが訴えを強め、この群れを滅ぼそうとしている間、見えない聖なる御使いたちが行き来し、彼らの上に生ける神の印を押していた。彼らは小羊とともにシオンの山に立ち、額には御父の御名が記されている者たちである。彼らは御座の前で新しい歌を歌う。それは、地から贖われた十四万四千人のほかは誰も学ぶことのできない歌である。「彼らは、小羊がどこへ行っても、これに従う者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられる初穂とされた。彼らの口には偽りが見いだされず、神の御座の前で傷のない者たちである。」

いまや、御使いのあの言葉が完全に成就した。「いま聞け、大祭司ヨシュアよ。あなたと、あなたの前に座っているあなたの仲間たちよ。彼らはしるしの人々だからである。見よ、わたしは、わがしもべである『若枝』を現す。」キリストは、ご自分の民の贖い主、救い出す方として現される。巡礼の涙と屈辱が、神と小羊のみ前での喜びと栄誉に取って代わるにつれ、残りの者たちは、まことに「しるしの人々」となる。「その日には、主の若枝は麗しく栄え、地の実はイスラエルから逃れた者たちのために尊く美しいものとなる。シオンに残される者、エルサレムにとどまる者は、皆、聖なる者と呼ばれるようになる。すなわち、エルサレムで生ける者のうちに記された者は皆そうである。」『証言』第5巻 474～476頁。

ヨハネの黙示録に出てくる十四万四千人は、地にある忌むべき行いのために「嘆き、叫ぶ」者として「印を押される」、エゼキエルが記した人々である。彼らは、キリストの義の衣と、ペテロが語る「王である祭司」、すなわちかつては神の民でなかったが今は神の民となった人々を象徴する清いターバンを与えられるときに、印を押される。

しかし、あなたがたは、選ばれた民、王である祭司、聖なる国、神に属する特別な民です。それは、あなたがたを闇からその驚くべき光の中へと召し出してくださった方の誉れを告げ知らせるためです。あなたがたは、以前は民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けていなかったが、今は憐れみを受けています。愛する者たちよ、寄留者また旅人として、魂に戦いを挑む肉の欲を避けるよう切にお願いします。異邦人の中での品行を正しく保ちなさい。彼らがあなたがたを悪を行う者だと非難しても、彼らはあなたがたの良い行いを見て、神が顧みてくださる日に神をあがめるようになるためです。ペテロの第一の手紙 2:9-12。

それゆえ、もしあなたがたがまことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての民のうちにあつて、わたしにとって特別な宝となる。全地はわたしのものだからである。あなたがたはわたしにとって祭司の国、聖なる国民と

なる。これがあなたがイスラエルの子らに語るべき言葉である。出エジプト記 19:5, 6.

この地の歴史の終末に、神は戒めを守るご自分の民との契約を新たにされる。「その日、わたしは野の獣、空の鳥、地を這うものと彼らのために契約を結ぶ。わたしは弓と剣と戦いをこの地から絶ち、彼らを安らかに住ませる。わたしはあなたを永遠にわたしに婚約させる。まことに、義と公正と慈しみと憐れみによって、あなたをわたしに婚約させる。さらに、真実をもって、あなたをわたしに婚約させる。あなたは主を知るようになる。」

「その日にはこうなる。『わたしは応える』と主は言われる。『わたしは天に応え、天は地に応える。地は穀物とぶどう酒と油に応え、それらはイスラエルに応える。わたしは彼女を地に、わがために蒔く。あわれみを受けなかった者を、わたしはあわれむ。わたしの民ではなかった者に『あなたはわたしの民だ』と言い、彼らは『あなたはわたしの神です』と言う。』ホセア書 2:14-23。」

「その日には、…イスラエルの残れる者、ヤコブの家の逃れた者は、…真実をもって主、イスラエルの聖なる方に寄り頼むであろう。」イザヤ書10章20節。「あらゆる国民、部族、言語、民族」から、「神を畏れ、彼に栄光を帰せよ。彼の裁きの時が来たからである」というメッセージに喜んで応える者たちが現れるであろう。彼らは、この地上に自分たちを縛りつけるすべての偶像から離れ、「天と地と海と水の泉を造られた方を礼拝する」。彼らは一切のしがらみから自らを解き放ち、神のあわれみの証として世の前に立つであろう。あらゆる神の定めに従い、彼らは「神の戒めを守り、イエスへの信仰を保つ者たち」として、御使いたちにも人々にも認められるであろう。黙示録14章6~7節、12節。

「見よ、その日が来る、と主は言われる。耕す者が刈り取る者を追い越し、ぶどうを踏む者が種をまく者を追い越す。山々は甘いぶどう酒を滴らせ、すべての丘は溶け流れる。わたしはイスラエルのわが民の捕らわれ人を帰らせ、彼らは荒れ果てた町々を建てて、そこに住む。彼らはぶどう畑を植え、そのぶどう酒を飲み、また園を造って、その実を食べる。わたしは彼らをその地に植え付け、わたしが彼らに与えたその地から、もはや引き抜かれることはない、とあなたの神、主は言われる。アモス書 9:13-15。」レビュー・アンド・ヘラルド、1914年2月26日。

十四万四千人の最後に選ばれた世代が封印された時点以降も、異邦人の訪れの日、十四万四千人の生き方（会話）の影響を受け得る異邦人がなお存在することは明らかである。

人間の力も人間の権勢も神の教会を建てたのではなく、またそれを滅ぼすこともできない。教会は、人間の力という岩の上ではなく、とこしえの岩であるキリスト・イエスの上に建てられ、「よみの門もそれに打ち勝つことはない」。マタイ16:18 神の臨在は、そのみわざに安定を与える。「君侯に、また人の子に頼るな」という御言葉が私たちに与えられている。詩篇146:3

「静まって、信頼することにあなたがたの力がある」。イザヤ30:15 義の永遠の原則の上に据えられた神の栄光あるみわざは、決してむなしく終わることはない。それは力から力へと進み、「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によって」と万軍の主は言われる。ゼカリヤ4:6

約束「この家の基を据えたのはゼルバベルの手であり、その手がまたこれを完成する」は、文字どおり成就した。9節。「ユダヤ人の長老たちは建て、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの預言によって事がはかどった。彼らはイスラエルの神の命令、またペルシャの王キュロス、ダリウス、アルタクセルクセスの命令に従って建て、これを完成した。この家は王ダリオスの治世六年のアダルの月〔第十二の月〕の三日に完成した。」エズラ記 6:14, 15. 『預言者と王たち』 595, 596.

13節から15節は、日曜法のとくに安息日を守る者たちの猶予期間が閉じるに至る預言的出来事を表している。また、それらはダニエル書12章10節にある三つの段階のうちの第三をも表している。10節は「清め」であり、11節と12節は「白くされる」を表し、13節から15節は、安息日を守る乙女たちが「試される」リトマス試験を表している。

ダニエル書における内的なメッセージは七章から九章のウライ川の幻によって表され、外的なメッセージは十章から十二章のヒッデケル川の幻によって表されている。十二章は内的な幻と外的な幻の双方の頂点であり、キリストが十四万四千人を起し清める方法を示している。十節から十六節は、1989年から四十一節と十六節の「日曜法」に至るまでの四十節の隠された歴史を表している。その隠された歴史に当てはまる節々は、十二章十節の完全な成就を表している。

多くの者が清められ、白くされ、試される。しかし、悪者は悪を行い、悪者のうちには悟る者はいない。だが、賢い者は悟る。日ごとのささげ物が取り除かれ、荒廃をもたらす忌むべきものが据えられる時から、千二百九十日となる。待ち望み、千三百三十五日に至る者は幸いである。ダニエル書 12:10-12

「十節から十六節を理解し、「知的」にも「霊的」にも封印された「賢い者」たちは、四十節の隠された歴史に示されている外的な預言のメッセージを理解しており、日曜法の前にその理解に「知的」に定着している。「賢い者」たちは、黙示録十一章十一節に示されている内的メッセージによって変えられ、日曜法の前にその経験に定着している者たちである。」

「賢い者」とは、「待つこと」に結びつく「祝福」を受けた者であり、それにより、十四万四千人は、十人の乙女の完全かつ最終的成就を成し遂げる者として印づけられる。黙示録11章11節は2023年7月に到来し、こうして「終わりの時」を画した。この時、ダニエル書と黙示録が二人の証人として、2023年7月に封印が解かれて増し加えられた知識が、十四万四千人の封印の過程を特定することを示している。11足す11は22であり、これは神性と人性の結合の象徴である。そして、十四万四千人を生み出す三段階の浄化過程を通過する者たちは、ダニエル書12章12節で示されており、それはパルモニのもう一つのしるしを与えている。というのも12掛ける12は十四万四千に等しいからである。

次回の記事でこの研究を続けます。